

毎月1日は「佐賀市いじめ・いのちを考える日」

すべての人に大切な人がいて、すべての人が誰かの大切な人・・・生きよう いのち

連日のようにいじめによる自殺が報道される中、佐賀市教育委員会では去る11月7日19時から緊急の校長・PTA会長の合同会議を開催しました。会議では今年4月以降のいじめ相談の件数、各学校の早期発見のための対応状況、及び今後の学校・家庭地域での対策等を議題にしました。また、古賀教育委員より教育心理学の専門的な立場からいじめ側の子どもの心理等についての講話を頂きました。最後に、毎月1日を「いじめ・いのちを考える日」とし、学校・家庭・地域社会のあらゆる場所で子どもたちと一緒にこの問題について考えていくことを提案し、参加者全員で確認しました。

教育委員会が今後の対策の一つとしたことは、12月1日に向けてパンフレットを作成することでした。タイトルを「学校で 家庭で 地域で いじめをなくそう そんなの力で!」としたA4版裏表の体裁のものです。これを2万部作成し、保護者・教職員・放課後児童クラブ指導員・公民館・幼稚園・保育所(園)関係者等に配布することにしています。第一回目の「考える日」は、これを使って市内のさまざまなところでいじめ・いのちについて取り上げてほしいと思います。

ところで私たち教育委員会が、毎月1日を「考える日」とした理由は次のことからです。

人間が一番大切にしなければならないものは、言うまでもなく「いのち」ですから、「一番大切なもの」の「一番」から、1日としました。自分のいのちも他の人のいのちも、理屈なしで人間にとって一番大切なものです。議論の余地はありません。でもここで考えてもらいたいことは、一人のいのちが如何に多くのいのちに支えられて存在しているかと言うことです。自分にいのちを授けてくれたのはお父さん・お母さん、その両親にいのちを授け、自分にいつも優しくしてくれるのはお祖父ちゃん・お祖母ちゃん、そしてそのまた・・・というつながりを家族や友達と話し合っただけで欲しいと思います。自分のいのちが、今突然に存在しているのではない、ということを理解して欲しいと思います。

次は、この「一番大切ないのちを生かす」という「生きる」ということです。親や教師は、子どもたちが「どう生きていくか、どう生きていったらよいか」ということを自ら考え、行動できるようになることを一番重要なこととして教え・支え・励ましています。この「教えることで一番重要なこと」の「一番」から1日としました。まだ小さな子どもには、どう生きるか、などとは迫りませんが、私たち親や教師の指導の方向は、一人一人の子どもたちが自立して生きていけるようになる、というものであるはずで

子どもたちに自分はどう生きていくのか、という目標をもてるようにすることができれば、当然、友達もそれぞれに目標をもって生きていくわけですから、お互いの生き方を尊重する関係も育っていくものと思います。自らがどう生きるかを考えながら、他の人の生き方も尊重する態度を育てていって欲しいと思っています。この時、親も教師も「カッコよく生きてきた、生きている」という姿ばかりを示し、子どもたちにも頑張ることのみを求めていくのは考えものです。親も教師も振り返ってみれば、失敗したり、悩んだりしながら生きてきているのではないのでしょうか。そういう普通の、ありのままの姿・生き方を隠すことなく見せ、語る事が重要だと思います。子どももホッとすると、親、教師と一緒に生きて方を考え合うことに価値があると思います。

三つ目は、いじめ・いのちについて考えるのは、学校だけでも家庭だけでも不十分です。社会全体が一つになって考えていかなければなりません。「社会全体が一つになって」の「一つ」から1日としました。いじめは子どもたちの世界だけに起きている事象ではありません。大人の世界にも多くあります。成人の自殺者は驚くほどの数です。子どもたちは毎日、新聞・テレビ等から大人の負の部分を見せつけられています。暴力・殺人・賄賂・恐喝……。テレビゲームでは「殺人もの」の連続です。ゲームがうまくできない時は、リセットしてやり直しています。「困ったら消す」の繰り返しです。思春期の子どもたちは、大人の負の情報やゲームのリセットをどのように受け止めているのでしょうか。いじめ・自殺問題は、まさに社会問題として大人自身も真剣に考えなければならぬことだと思います。

毎日浴びせられる負の情報は、時として、子どもたちの価値観を混乱させてしまいます。そんな時、親に相談しようとしても身近にいないことがあります。朝食を、夕食と一緒に食べることも少なくなってきました。子どもは忙しくしている大人には、相談することを遠慮します。自ら身を引いてしまいます。「なんと言ってくれなかったのか」ではなく、子どもはそういうものであることを知ることです。親には子どもの躰、人としての基本的な在り方を教えるという第一義的な役割があります。そのためには今、わが子がどのような情報にさらされているか、交友関係はどうか、いじめ・自殺あるいは生・死についてどんな考えをもっているか、将来の目標をどう描いているか……。こういったことについて親は知るべく、子どもとの会話をして欲しいと思います。また親としての考えを語ってほしいと思います。子どもの心に少しでも近づこうとする親の努力を求めたいと思います。まずは、社会からの負の情報に打ち勝たなければなりません。各家庭における緊急の重要課題です。

子どもが忙しくしている大人に近づかないことは、教師に対しても同じです。現在、教師は十分な相談時間が取れないでいる、と言わざるを得ません。かつては家庭・地域社会の教育力により自然な形で育てられてきた生活習慣や耐性、他の人に迷惑をかけないこと・一人一人が守るべきルール等が、今では学校の仕事になっています。どの学校

に行っても「基本的な生活習慣」が指導の重点項目となっています。加えて、5日制等の教育制度改革により事務量も増えています。しかし、今こそ教師は、可能な限り子どもたちとの自由な会話を楽しむ時間を作りだすことに努めて欲しいと願います。学校の仕組みとして作り出してほしいと思います。また、スクールカウンセラー等の相談時間を増やすことも必要だと思っています。更には、教師の指導に、「社会的^{ちから}力」を与えることも強く望みたいと思います。教師への社会的信頼を社会が揺るがしているようでは、教師と保護者との協力・連携も進まず、子どもたちに対する指導も徹底しないことになってしまいます。教師の資質向上は言うまでもありませんが、教師が毅然として指導していることに、社会が応援していく環境を作らないで、教師・学校パッシングをしても、事態は進展しません。当面、学校には多くの大人が、地域の方々がおいで頂き、子どもと会話したり、お話を聞かせたり、一緒にお掃除をしたりしていただけるとありがたいと思います。事業所では、中学生の就業体験を積極的に受けてほしいと思います。よろしくお願い致します。

ここで、教育委員会が今準備に取りかかっている新規事業構想について、少し触れたいと思います。それは、社会全体が一つになって子どもたちを守り、育てていこうという市民運動のことです。学校が、家庭が、地域が、という責任転嫁的な論議を超えて、佐賀市民が一つになって、未来の佐賀を担う子どもたちに温かい眼差しを向けていこうという運動です。

既に市内には児童生徒の健やかな成長を願って活動しているたくさんの組織があります。PTAでは、挨拶運動とおにぎり弁当の取り組みをしています。青少年健全育成連合会では市民総ぐるみ街頭活動を行なっています。地域にはその地域ならではの行事があり、子どもたちに継承を求める活動が行なわれています。登下校の安全を守ってくださっている方々もおります。地域子ども教室や地域スポーツクラブの活動も行なわれています。子ども会による様々な体験活動も、公民館での通学合宿も、その他様々な団体による子どものための活動が行なわれています。これが佐賀市です。また、現在、教育委員会では企業・事業所の朝会等で従業員の方々に活用して頂きたいと「佐賀市版家庭教育読本・親の役割」のようなものを作成していますが、この市民運動には、市内の企業・事業所もこのような形で加わって頂きたいと思っています。

このように佐賀市教育委員会がこの間提唱してきている「子どもが育つ4つの場」、即ち、家庭・学校・地域・事業所が大きく連携し、「大人は何をしたらよいか」という大人の役割を緩やかに問い合いつつ、それぞれの組織の活動を展開していく、という市民運動を考えています。子どもに何々をさせる、というのではなく、大人の意識を振り返ることに主眼を置いた運動を考えています。

事業構想については、まだまだ概念的な段階ですが、多くの市民の皆さんと考えを出し合い、創り上げていきたいと思っています。

「いじめ・いのちを考える」とは、子どものみを対象とした、部分的な、一時的なものではなく、大人の就労場所、勤務時間をはじめ、大人の生き方、モラル、地域社会・コミュニティの在り方をも考えていくことを底辺に置いておかなければならないと思います。

26日の第20回佐賀市少年の主張大会で、ある小学6年生がいじめ問題を取り上げ、その中で「傍観者になってはいけない」と主張されました。まさにその通りです。大人も批判者・批評家だけでなく、行動する人になっていきたいと思います。

平成18年11月27日

教育長 田部井洋文